ポスター番号１　　**実践発表**

家庭における少数派言語文化の継承
―ことばと文化の豊かな継承に向けた親の工夫と、親への支援―

石井恵理子　（東京女子大学）

１．目的

日本語環境が乏しい孤立地域で子どもの日本語を育てる親は、リソース不足や支援方法の適切性等に関する不安や孤立感、親子であるがゆえの働きかけの難しさなどの困難を感じている。そうした状況で親自身が支援を得られることが重要である。「親は、他者とのかかわりを通して自己のありようを模索」(秋山 2016)する。親と子どもの言語世界の変化を共有し、具体的なエピソードや実践に基づく対話の中で親が異なる視点を得ることで、ことばを育てる意味や方法を確認し、子どものことばの世界を多様な機会を捉えて拡大していくことにつながるものと考える。

２．実践の概要

本実践は日本語環境が極めて乏しいタイの地方で子育て中の日泰国際結婚家庭を対象とする。親子のやりとりや行動から見える関係性等について、母親が他者との対話によって解釈の確認や捉え直しを行うこと、新たな視点の獲得や具体の活動に発展させていくこと、そして親と共にその意味づけを確認しあう対話が親への支援実践と対話の全体を実践として捉える。様々なエピソードから見えてくる子どもたちの興味関心の様子や変化、母親の気づきやこれからの方向性等について、エピソードを共有しながら、子どもの状況や変化の様相について多様な観点から解釈を試みる対話は、「家族を結ぶことば」の保持・育成を願う親の日々の実践を意味づけ、これからの展開の可能性について肯定的な見通しを持って進めて行く力添えとしての機能を果たす支援となるものと考える。

2017 年 3 月に支援者(筆者)とタイ語・日本語環境で子育てをしている母親が、タイでの複数言語環境の子どものことばに関する研究会で出会い、多言語環境の子どもの言語状況について母親にインタビューを行った（調査として依頼し録音データを得た）ことから、対話が始まった。同年 6 月に支援者が再度タイを訪問した際に、母親がその後の展開等を報告に訪れ(録音なし)、2017 年 3 月に 3 回目の面談を持った。その後はメールでやりとりをした(2017. 3～2018. 11 に 4 往復)。メールは母親が話したいことがあるときに発信され、子どもたちの状況に関する新たな局面や成長が見て取れるエピソード、今後の方向性についての確認など、小学校中・高学年、中学校進学準備段階という変化の著しい年齢の子どもの様子に寄り添う母親自身の気持ちが語られた。支援者は母親の語りを受け止め、他者の視点から出来事を意味づけ、共に考える立場をとった。

家族は、母・日本人（日本語教師,英語 H,タイ語 L)、父・タイ人（日本の大学に留学経験有、タイ語、日本語会話 H、英語)、兄（タイ生まれ、2 才から 2 年間日本の幼稚園。実践開始時 11 才･小 5)，妹（日本生まれ、2 才からタイ。実践開始時 9 才･小 3)。日本語話者が極めて少ない地方に居住。母と子は日本語、父と子はタイ語･日語、家族では原則日語（徐々にタイ語が増加)。

３．日本語力の伸長を目指す母親の環境整備

3.1　幼少期から小学校段階までの母親の意識と努力（2017 インタビュー）

母は「タイに生きるタイ人として生きていく子どもたちであり、タイ語で教育を受ける」ことを前提としている。居住地は日本人がほとんどいない地域で、日本語リソースの入手は困難であ

る。幼少時から綿密に子どもの言語・教育について最大限の環境を整える努力を続けている。娘の出産時から日本で 2 年間過ごした時は兄を幼稚園に入れ、児童館に通うなど日本でのリソースを積極的に活用する。タイ帰国後も仲良くなった母子と文通を続け、一時帰国時には日本の小学校に体験入学をさせるなどの努力を続けた。

3.2　日本語保持についてのエピソードと支援者のコメント(⇒)　(2017 インタビュー, メール)

①子どもたちは学校での出来事などタイ語で経験したことを日本語で説明することが困難になり始めた。漢字に拒否反応を示し始めた兄、タイ語混じりの会話になってきた妹の様子に、いずれ子どもの悩みを母子で相談できなくなるのではとタイ語が弱い母として不安を感じている。

⇒(支援者) 日本語ができても親には話せないこと、相談相手を選ぶことが出てくる。子どもの全てを親が受け止めるのは、ことばが共有できても難しいことがあると思う。

②「漢字はもうやらない」と兄に宣言された。4 年生ぐらいの漢字しか持っていない。

⇒4 年生レベルなら基本の漢字力はできている。無目的に覚える努力はエンドレスに思える。日本に行った時に実際に役だったと感じられる機会を作ること、アニメでも漫画でも理解したいと思うものを見つけると、自分で学び始めるのでは。

・帰国の友人から，今まで与えなかった漫画を大量にもらった。娘はコナン、兄は龍馬にはまった。読めない漢字を聞いてきたり「脱藩」を覚えて別の場面で「脱出」の意味を推測できたり。日本に行った時漫画じゃない本を買おうと思うが、それはやめた方がよいか？

⇒子どもが選んだものは自分から分かりたいと努力する。母が薦めたい本も無理せずタイミングを見計らって示すと結構受け入れられるかも。どちらかではなくて良い。これまで体系的な学びを準備し進めてきた力のある母が、子ども自身の選択にぶつかった段階で、他者の意見を聞くことで、不安の軽減・解消、異なる視点や他の選択肢に気づく契機となった。毎年の日本帰省時に、電車の路線や駅の漢字を見て動くなど実践としての漢字体験を提案した。

③日本訪問時　2017：兄は一人で電車に乗るのが怖く、徒歩圏での行動のみだったが、次回は電車に乗ることを目標にする。2018：兄が大好きな坂本龍馬の展覧会情報を母が見つけ、見に行く。解説文等わからないことが多いが熱心に見学（現実の日本語読解体験）。日本人が一つ一つ順番に見学していく様子を見て、文化による楽しみ方の違いに気づく。

④妹はカルタに興味をもち、犬棒カルタ遊びに熱中。母が読み手で父もゲームに参加。兄は読み手にもなる。YouTube で競技カルタの映像を見、アニメ「ちはやふる」に夢中になり百人一首の世界にはまる。競技カルタのルールを理解して札を覚る。母が全ての読み札をプリントアウトし、現代語訳とアニメ画像も貼り付けたノートを作成して渡すと、娘はそれをタイ語に訳した。仲の良い日系の友だちの誕生日には友だちの名前の文字で始まる百人一首の札をカードに仕立て、日本語の意味とタイ語での説明を書いてプレゼントした。

⇒子どもの心が動くと、大人の計画を超えて遙か彼方に飛んで行く。その下地作りが親の役目。

4. まとめ

他者との「対話」は自身の問題意識や価値観、目標だて等について、異なる視点を交えて検討する機会となる。継承語保持に対する直接的活動支援ではないが、親の子育ての悩みに寄り添い、共に考える他者との対話は、孤立環境での継承語育成に有効な支援となりうると思われる。

【参考文献】

秋山幸 (2016)「親から子どもへ向けた言語教育観が見据える人としての成長―カナダの日本語使用家庭に焦点を当てて―」『早稲田日本語教育学』22,早稲田大学大学院日本語教育研究科,pp.1-22